

三つの百周年にのぞんで

An Essay on a Triple Centennial of the CHSSL

森 宜 人

MORI Takahito

2020年4月1日付で前任の屋敷二郎先生の後任として社会科学古典資料センター兼務を拝命しました。まだ緊急事態宣言は出されていない段階でしたが、すでに新年度の授業の全面オンライン化が決定され、附属図書館会議室で行われた辞令交付式でも参列者全員がマスク着用の非常に物々しい雰囲気満ちていました。

2020年は世界中が悪疫に翻弄され続けた年として歴史に刻まれることになりましたが、本学にとっては大学昇格百周年にあたり、本来でしたら盛大に寿ぐべき年になるはずでした。明けて2021年、本年は当センターの代表的コレクションであるギールケ文庫が入手されてからちょうど百年目にあたり、続く2022年はメンガー文庫入手の百周年にあたります。

両文庫の入手にあたっては、第一次大戦の余燼がまだ消えやらぬドイツに留学中の孫田秀春や、大塚金之助、金子鷹之助ら本学の先達たちが奔走したことはよく知られています。その経緯はすでに『一橋大学附属図書館史』(1975年)をはじめとする多くの本学関係資料で紹介されているので詳細は割愛しますが、ギールケ及びメンガーの関係者との折衝に苦労が絶えなかっただけでなく、大戦後にドイツとオーストリアで昂進したインフレの余波が購入手続きを進める上で大きな障壁となったことが異口同音に語られています。さらに両文庫の日本到着後ほどなくして東京は関東大震災に襲われ、苦心惨憺の末に入手された貴重な書籍があわやすべて灰燼に帰すところでした。

非常に個人的な話ですが、両文庫と初めて対面したのは大学院博士後期課程在籍時のことです。当時センター助手をつとめていた土肥ゼミの先輩石井健さんより、メンガー文庫のデジタル化のお手伝いにお声がけいただき、書庫内で数週間作業に従事しました。石井さんにマックス・ヴェーバーの自筆サイン入り「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の抜刷をはじめとする数々の貴重書をご紹介いただき、実際に手に取ることができた感激は今でも鮮明に記憶しています。

ドイツ史研究者の末席に連なる身としましては、今般の悪疫流行によって現地のアルヒーフで直に史料を閲覧できなくなったことで、これまで自分の研究がいかんにか現代の交通インフラの恩恵を受けてきたのかを改めて痛感しました。その一方で、研究室に居ながらにして閲覧可能なデジタル化された史料の有難味をかみしめ、当センター所蔵資料のデジタル化のさらなる拡充が急務であることを実感することとなりました。

ギールケ文庫とメンガー文庫の最初の百年の幕開けも波乱に満ちたものでしたが、現下の悪疫対応が次の百年の基礎固めとなるよう心がけ、微力ながら社会科学の世界的な遺産の継承に貢献したいと思います。そして、やはり探し求めていた史料・文献を直接ひもとく時の高揚感格別なものですので、何の制約もなく自由に調査に旅立てる日が一日も早く戻ってくることを

を願ってやみません。

(一橋大学社会科学古典資料センター教授)